

対話で拓く吃音の世界

～ どもる子どもたちの「ことばの力」を信じて ～

神奈川県横浜市立東小学校

土井 幸美

1 はじめに

(1) 「子どもらから学ぶ」二つのエピソード

「ふふふ、先生、それじゃ、いつまでたっても食べ終わりませんよ。」

30年前、私の教員生活は肢体不自由児特別支援学校から始まった。摂食指導の研修で学んだスキルを用いて、無言でマー君の口にスプーンを向ける私に、食事介助の伝達に来ていたお母さんが微笑みながらおっしゃった言葉だ。マー君も「先生、おかしいよね～」と、それらしくお母さんに話しかけながら大笑いしていた。「マー君、どれ食べたい？」「これだったら、これくらい（の量）、いい？」と、食べたい順番や食べられそうなひと口の量を、お母さんはいつもマー君に教えてもらいながら食事を進めていた。

地域での日本語支援を長く続けていた私は、1997年、ろう文化宣言¹⁾に出会い、日本語教育の経験を活かして、手話と日本語のバイリンガル教育の実践をろう学校でしてみたいと考えた。実際に異動してみると、その環境はまだ整っていなかったが、そこでろうの保護者となつたり、ろうの人たちのコミュニティにも積極的に参加し、難聴やろうの当事者が「なりたい自分」「選択したい生き方」をいっしょに見つけていくことが私の役割だと思えるようになった。

この二つのエピソードは、その子ども自身や当事者から学ぶ姿勢の大切さをいつも思い出させてくれる。最近、療育や特別支援教育の現場で専門的な支援が充実していく一方、支援の対象となった子どもらが“小さき存在”と見なされ、その子どもの本来もっている力を無力化してしまわないだろうか、と感じる場面がしばしばある。

(2) どもる人たちの当事者研究との出会い

どもる子どもへの向き合い方が具体的に変わったのは、2013年に『吃音の当事者研究～どもる人たちが「べてるの家」と出会った～』²⁾を読んでからだ。著者の向谷地生良さんについては「べてるの家」の活動で知っていた。また、伊藤伸二さんは「吃音者宣言」³⁾を発表し、「治すことにこだわらず、どもりと共に豊かに生きよう」と提唱し続けている方だ。私自身の変容に影響を与えたのは、二人が共通して伝える「他人の価値に生きない」という哲学だった。どもる子どもの中には、ことばの教室で出会う頃に、どもる自分についてマイナスに感じている子どももいる。しかし、その出会いが「どもっていたからことばの教室に出会えた」と受け容れられ、その子自身が「わたしは、わたしのままでいい」と感じられる育ちの同行者になりたいと思うようになった。

2 子どもたちの「ことばの力」を信じて

どもる子どもたちが吃音を肯定的にとらえられるようになるためには、子どもたちと、吃音について、いっしょに学び考える対話をしていくことが、吃音と共に生きていく土台

づくりになると考えている。新学習指導要領の目標にも「主体的・対話的で深い学びの実現」が明記されている。最近、私は「きこえとことばの教室は『自分研究』をする教室。自分のことをよく知るために通級しているんだよ。」と、どの子どもにも伝えるようにしている。出会いの始まりは、難聴や吃音、構音障害、ADHD、ASDなどの“ラベル”は脇に置いて、丸ごとの自分を自分なりの言葉でそれぞれ子に語ってもらう。そこを経た後に、通級とつながったテーマへ近づいていくようにしている。

3 実践の内容

(1) どもる子どもたちとの対話の前提について

① 子どもとの関係性は対等で築く。

吃音についてどのように感じ、考え、今後どうしたいかを知っているのは、どもる子ども自身だ。担当者としては、先入観をもたず、どもる子どもたちが生活している社会の価値観を、その子ども自身が感じているままに語ってもらうようにしている。4)

② その子ども自身の吃音への思いを具体的に知る。＝対話のためのアセスメント

「質問自己紹介」や「対人関係・人間関係のチェックリスト」「吃音に対する気持ちや考えのチェックリスト」「行動のチェックリスト」5)を活用し、ニーズを知る。

(2) 対話の実際 ～A君（4年生）との対話～

「はじめまして～。よろしくお願ひします。」

しっかり通る声で挨拶する元気な男の子だな、というのがA君の初対面の印象だった。第一回のA君との対話。

土井：5月の連休に何をしていたの。

A君：ぼく、どっちかっていうと“ひきこもり”なんです。

土井：ひきこもりっていうのは、自分に自信がなくなっちゃって、誰も僕のことは解ってくれないって思いから、外に出られなくなる人のことで、家の中で過ごしていたというA君は、そうじゃないような気がするけど…。

A君：僕、大変なんです。耳も中耳炎だし、骨折だってすぐしちゃうし、言葉もどもっちゃうし。そういう病気なんですから、いろんな人に僕の苦勞をわかって欲しいんです。

土井：そっかあ、中耳炎は病気だけど、骨折は怪我って言った方がいいかな。それから、どもりは病気じゃないんだよ。

A君：ああ、そうですかあ。でも、病気じゃないってなると、人に伝えにくいじゃないですか。クラスの子は、ほとんど僕のしゃべり方、わかってくれてるから何も言わないけど、他の学年の人とか、わかってないし。僕としては、こういうしゃべり方だってことをみんなにわかって欲しいです。

土井：じゃ、まず、A君が自分の吃音についてどう思っているかを教えてほしいなあ。

2回目に「吃音に対する気持ちや 考えのチェックリスト」7) を行った。吃音を「できれば治したい」と考え、どんな場面がそう感じさせるのかを具体的に教えてもらった。リストを用いた対話の中で、A君の「いま、ここ」の気持ちを正確に知ることができた。

その後もクラスの友達に伝えたいという願いは続いていたので、吃音についての発表を自分の学級で行った。「A君はA君らしく話しているんだな、と思いました。」との感想があり、担当者としては話を聞いた子どもたちがA君に対して“かわいそうだから親切にしなきゃ”という感じにならなかったことにホッとした。学級で子どもが自分のことを理解して欲しいと表明する時、授業後にもクラスの中での関係性が対等に保てる伝え方を子どもと一緒に工夫する必要があると考えている。

発表の準備を通して吃音の客観的知識を得られた頃、「自分研究」の一つとして、吃音キャラクターづくり7)を用いての対話をした。自分のどもりをどんな感じにとらえているかを言葉で共有していくことができた。『サイコロ』図1)

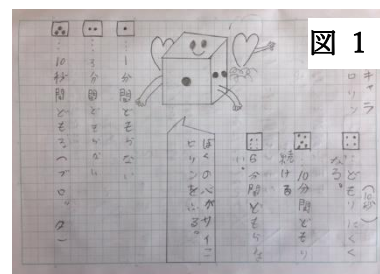


図 1

A君：これは、もう、いつ、どの目が出るかわかんないんです。出た目に体は従わなくっちゃいけないって感じで。

土井：以前に担当した子も、『ルーレシー』というキャラクターを考えて、「ボタンを押したら、トゥルトゥルトゥルって腕時計みたいなルーレットが回って“どもる・どもらない”って決めるの。」って話していたよ。

A君：そうなんだよ、いつ、どうなっちゃうか、予測不可能なんだよ。

土井：予測不可能って、怖い？

A君：まあ、その時はどうしよう、どうしよう、って焦るけど、最近は、そうなったらそうなったでいいかあ、とも思ってる。

土井：いやあ、A君、もはや悟りの境地だね、すごい。

子どもたちとの対話では、当事者でない自分よりずっと深く生きているなあと感じる瞬間によく出会う。そういう時は、人として尊敬している態度を率直に表し、子どもに伝えるようにしている。

(2) いろいろな教材を用いて ～Bさん(2年生)と「吃音のつみ木」7)で対話～

Bさんは、自分のクラスに吃音でことばの教室に通っている男子がいるのを知り、ことばの教室に行きたい思いを保護者に伝えて通級につながった。初回面談では、吃音の様子はほとんどなかった。

土井：Bさんが気にしているほど、言葉がつまるのは気にならないんだけど。

Bさん：今日はそうかもしれないけど、家とか学校だといっぱいあるの。それで、友達から変な目で見られる。

土井：そういう話し方すると、友達が変な目で見ると？

Bさん：「Bさん、なんでそんな話し方なの？」って言ってきたりする。

土井：言葉がつまるのは、吃音っていう名前があって、その人その人の話し方の違いだから、お友達に「これ、吃音っていうんだよ。私、時々、そういう話し方になるんだ。気にしないで。」って説明したら、友達も気にしなくなるかな。

Bさん：そうなんだけど、その説明をする時に吃音でうまく言えなかったらどうしよう。

土井：Bさんは、スラスラ言えると、うまく言えたって思うんだね、なるほど。私は、スラスラじゃなくても、中身が伝わればうまく言えたと思うけどなあ…。

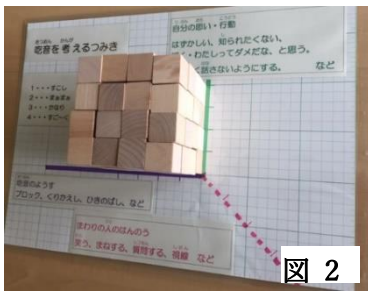


図 2

通級指導ではBさんの心配を受けとめながら、実際の自分のどもる状態と自分の気持ち、周りの子どもの反応をどう考えているのかなどを知っていくために、ウェンデル・ジョンソンの言語関係図を積み木にした教材(図2)を用いて対話をした。始めにX軸(吃音の症状)を考えた時点では少なく評価していたが、Z軸(本人の受けとめ)のところでは対話をしていると、自分の吃音への思いとの辻褄を合わせるためにX軸を改めて増やしていた。実際、どもる大人の人にも、どもることがほとんど無いのに悩みがとても深い方がいる。2年生であっても、感性の豊かな子ほど「吃音はよくないことだ」との否定的な物語をもってしまうことを教えられた対話だった。Bさんが吃音について「別の肯定的な物語」を発見できるよう、複数の方向から働きかけながら対話を続けている。

4 これから目指したいもの ～ポジティブ・ケイパビリティとネガティブ・ケイパビリティ～

A君に保護者会へゲスト参加した成人のどもる人について話題にすると、「え～、大人になっても、そんなにどもったままなの？」と驚き、大人になるまでにどもりがなくなって欲しい、という願いを伝えてくれた。その気持ちはそのままに、保護者とも対話をした。人は“揺らぎ”ながら変容を遂げてくのだとあらためて感じた。焦らず、A君親子の“揺らぎ”に同行する覚悟ができた。この覚悟に必要なのは、性急に問題解決をしてしまわない能力だと思っている。最近、教育の分野、特別支援教育においても、問題解決能力(ポジティブ・ケイパビリティ)を伸ばすことが主流になっている印象がある。しかし、拙速な問題解決は問題の複雑さや豊かさを削ぎ落してしまいかねないのではないか。大多数の人々が即効性を求め、効率の良さを目指す時代。だからこそ、今は解決できなくても「答えの出ない事態に耐える力」＝消極的能力(ネガティブ・ケイパビリティ)6)を培う対話を通して、吃音と共に生きる豊かさと奥深さを探求する同行者でありたいと思う。これからも、言葉の力を信じて、どもる子どもたちと対話を続けていきたい。

1) 現代思想編集部編『ろう文化』青土社 1996年 木村晴美・市田泰弘 ろう文化宣言

2) 向谷地生良・伊藤伸二『吃音の当事者研究—どもる人たちが「べてるの家」と出会った』金子書房 2013年

3) 『吃音者宣言—一言友会運動十年』たいまつ新書 1977年

4) 伊藤伸二・国重浩一『どもる子どもとの対話—ナラティブ・アプローチが引き出す語る力』金子書房 2018年

5) 伊藤伸二・吃音と生きる子どもたちと同行する教師の会 親、教師、言語聴覚士が使える『吃音ワークブック』解放出版 2010年

6) 帯木蓬生『ネガティブ・ケイパビリティ 答えの出ない事態に耐える力』朝日新聞出版社 2017